

©Derwent Information

## Cosmetics for improving and preventing wrinkles comprises plant extract, stearyl glycyrrhetinate and epsilon amino:caproic acid

**Patent Number : JP08268859**

International patents classification : A61K-008/30; A61K-008/00; A61K-008/44; A61K-008/68; A61K-008/96; A61K-008/97; A61Q-001/00; A61Q-001/12; A61Q-019/00

**• Abstract :**

JP08268859 A Cosmetics comprises extract of plant and stearyl glycyrrhetinate or epsilon aminocaproic acid.  
ADVANTAGE: Wrinkle of skin can be improved and prevented.

**• Publication data :**

Patent Family : JP08268859 A 19961015 DW1996-51 A61K-007/48 Jpn 7p \* AP: 1995JP-0077581 19950403  
Priority n° : 1995JP-0077581 19950403  
Covered countries : 1  
Publications count : 1

**• Patentee & Inventor(s) :**

Patent assignee : (KAOS) KAO CORP  
Inventor(s) : HONMA S; KAMISAKA T; KIMURA H; SUKAI I; TOYODA R

**• Accession codes :**

Accession N° : 1996-514880 [51]  
Sec. Acc. n° CPI : C1996-161179

**• Derwent codes :**

Manual code : CPI: D08-B09A  
Derwent Classes : D21

**• Update codes :**

Basic update code :1996-51

**Others :**

ICAA

A61K-008/30 [2006-01 A F I R - -]; A61K-008/00 [2006-01 A L I R - -]; A61K-008/44 [2006-01 A L I R - -]; A61K-008/68 [2006-01 A L I R - -]; A61K-008/96 [2006-01 A L I R - -]; A61K-008/97 [2006-01 A L I R - -]; A61Q-001/00 [2006-01 A L I R - -]; A61Q-001/12 [2006-01 A L I R - -]; A61Q-019/00 [2006-01 A L I R - -]

ICCA

A61K-008/30 [2006 C F I R - -]; A61K-008/00 [2006 C L I R - -]; A61K-008/96 [2006 C L I R - -]; A61Q-001/00 [2006 C L I R - -]; A61Q-001/12 [2006 C L I R - -]; A61Q-019/00 [2006 C L I R - -]

Keyword Index Terms

[1] 8988-USE

DCR

8988-U

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平8-268859

(43)公開日 平成8年(1996)10月15日

(51)Int.Cl. <sup>6</sup>	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
A 6 1 K	7/48		A 6 1 K	7/48
	7/00			7/00
				K
				C
				W

審査請求 未請求 請求項の数3 O L (全 7 頁)

(21)出願番号	特願平7-77581	(71)出願人	000000918 花王株式会社 東京都中央区日本橋茅場町1丁目14番10号
(22)出願日	平成7年(1995)4月3日	(72)発明者	上坂 敏雄 埼玉県熊谷市玉井2063-2
		(72)発明者	木村 秀雄 千葉県松戸市五香六実5-120 B102
		(72)発明者	本間 成二 千葉県千葉市花見川区朝日ヶ丘町1-3 花王寮
		(72)発明者	須貝 一郎 千葉県船橋市東中山2-11-29-214
		(74)代理人	弁理士 有賀 三幸 (外3名) 最終頁に続く

(54)【発明の名称】 シワ予防・改善化粧料

(57)【要約】

【構成】 次の成分(A)及び(B)：

(A)植物抽出物、(B)グリチルレチン酸ステアリル  
又はイプシロンアミノカプロン酸を含有するシワ予防・  
改善化粧料。

【効果】 シワ予防・改善効果に優れる。

## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 次の成分(A)及び(B)：

(A)植物抽出物、(B)グリチルレチン酸ステアリル又はイブシロンアミノカプロン酸を含有するシワ予防・改善化粧料。

【請求項2】 成分(A)の植物抽出物が、ハマメリス、ボタン、ショウキョウ及びセンキンシから選ばれる1種又は2種以上であり、かつ成分(A)の含有量が乾燥固形分に換算して0.0001～10重量%である請求項1記載のシワ予防・改善化粧料。

【請求項3】 成分(B)の含有量が0.001～5.0重量%である請求項1又は2記載のシワ予防・改善化粧料。

## 【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、シワの予防・改善効果に優れた化粧料に関する。

【0002】

【従来の技術】真皮とトラブルの一つであるシワは、加齢や太陽光線による皮膚の老化(光老化)により発生する。老化のメカニズムは明らかではないが、皮膚の場合、生体の最外層に位置して、生体防御の最前線の役割を担っていることから、環境因子による障害の蓄積が皮膚加齢現象に大きく作用していると考えられる。とりわけ紫外線は皮膚加齢、シワ形成に関与する最大の環境因子と考えられる。すなわち、紫外線により産生されるフリーラジカル(特に活性酸素)は日焼けなどの急性炎症のみでなく、慢性的に繰り返されることにより光老化を誘発することが知られている。詳細には、紫外線により発生する各種フリーラジカルや活性酸素(スーパーオキシド、ヒドロキシラジカル、一重項酸素等)は真皮成分のDNA-蛋白クロスリンク(架橋結合)、コラーゲンやエラスチンなどの蛋白クロスリンクの障害、変性、SODなどの抗酸化酵素の不活化、細胞成分の膜脂質過酸化とこれによる細胞機能の劣化などを惹起し、その結果として老化、シワが形成され则认为られている(フレッグランス ジャーナル、11巻、49-54、1992)。

【0003】近年、化粧人口に占める高齢者の割合が増加するに伴ない、このような肌の老化、特にシワを予防し、改善する化粧料が望まれている。

【0004】従来、シワ形成に対する予防改善剤としては、レチン酸及びその誘導体(特開平6-24958号公報等)、アスコルビン酸誘導体(特開昭61-30510号公報、特開昭61-152613号公報等)、ビタミンE(特開昭62-19511号公報、特開昭62-87506号公報等)、 $\gamma$ -アミノ酸誘導体(特開昭62-255405号公報、特開平2-62810号公報等)がすでに提案されている。

【0005】しかしながら、これらは安全性、安定性及

び効果、特にシワ予防・改善効果において満足できるものではなかった。

【0006】

【発明が解決しようとする課題】従って本発明の目的は、シワ予防・改善効果に優れた化粧料を提供することにある。

【0007】

【課題を解決するための手段】斯かる実情に鑑み本発明者は、紫外線照射によるシワ形成モデルを用いて、シワ予防・改善効果を種々の天然物、化合物について調べた。その結果、植物抽出物に高いシワ予防・改善効果を有することを見出し、さらにこれとグリチルレチン酸ステアリル又はイブシロンアミノカプロン酸を組み合わせることにより、その効果が著しく増強されることを見出し、本発明を完成した。

【0008】すなわち、本発明は、次の成分(A)及び(B)：

(A)植物抽出物、(B)グリチルレチン酸ステアリル又はイブシロンアミノカプロン酸を含有するシワ予防・改善化粧料を提供するものである。

【0009】本発明に用いられる(A)成分の植物抽出物としては、ハマメリス、ボタン、ショウキョウ、センキンシ、ニンジン、ゲンチアナ、ハコベ草、シャクヤク、キササゲ、パセリ、甘茶、甘遂、連銭草、柿の葉、カミツレ、浮き草、ショウガ、延命草、タイム、カワラヨモギ、アロエ、イチヨウ、オウゴン、オウバク、オウレン、カンゾウ、キキョウ、キクカ、キョウニン、クマザサ、ゲンチアナ、コンフリー、サンザシ、クチナシ、ドクダミ、シラカバ、セイヨウノコギリソウ、センキュウ、クワ、チンピ、トウキンセンカ、トウニン、トウヒ、ノバラ、ビワ、ベニハナ、セイヨウハッカ、マロニエ、ムクロジ、もも葉、ヤグルマギク、ユリ、ヨクイニン、レイシ、レンギョウ等由来のものが挙げられ、このうち、ハマメリス、ボタン、ショウキョウ、センキンシ(千金子)、ゲンチアナ由来の抽出物が好ましい。

【0010】これらの植物の抽出物は、各植物の全草又はその葉、樹皮、根及び枝のうちの1又は2以上の箇所(以下「原体」と称する)を乾燥し又は乾燥することなく粉碎した後、常温又は加温下に、溶剤により抽出するか又はソックスレー抽出器等の抽出器具を用いて抽出することにより得ることができる。ここで、使用される溶剤は特に限定されず、例えば、水、メチルアルコール、エチルアルコール等の1級アルコール、プロピレングリコール、1,3-ブチレングリコール等の液状多価アルコール、酢酸エチルエステル等の低級アルキルエステル、ベンゼン、ヘキサン等の炭化水素、エチルエーテル、アセトン等の公知の溶媒が挙げられ、これら溶媒は、1種又は2種以上を組合せて使用することができる。原体からの好ましい抽出方法の具体例としては、乾燥粉碎物100グラムに50v/v%エタノール100

10

20

30

40

50

0mlを加え、室温で時々攪拌しながら3日間抽出を行う。得られた抽出液を濾過し、濾液を5℃で3日間静置したのち再度濾過して、上澄みを得る。以上のような条件で得られた植物抽出物は、抽出された溶液のまま用いても良いが、さらに必要により、濃縮、濾過等の処理をしたものを用いることができる。

【0011】成分(A)の植物抽出物は、1種又は2種以上を組み合わせて用いることができ、乾燥固形分に換算して全組成中に0.0001~10重量%配合するのが好ましく、特に0.0001~5重量%、さらに0.0001~1重量%配合する方が十分な予防・改善効果が得られるので好ましい。

【0012】本発明に用いる(B)成分のグリチルレチン酸ステアシル、イブシロンアミノカブロン酸は市販のものを用いることができ、これらは、いずれか一方でも双方を組み合わせて用いてもよい。成分(B)は全組成中に0.001~5重量%配合するのが好ましく、特に0.001~2重量%、さらに0.001~1重量%配合する方が十分な予防・改善効果が得られるので好ましい。

【0013】本発明の化粧料には、上記必須成分の他、本発明の効果を損なわない範囲で通常の化粧料に配合されている油剤、界面活性剤、pH調節剤、セラミド類、擬セラミド類、保湿剤、ステロール類、アルコール類、キレート剤、抗炎症剤、一重項酸素消去剤、紫外線吸収剤、防腐剤、増粘剤、色素、香料等を必要に応じて配合することができる。

【0014】ここで用いる油剤としては特に限定されないが、パルミチン酸イソプロピル、ステアリン酸ブチル、ミリスチン酸イソプロピル、フタル酸ジエチル、乳酸ミリスチル、アジピン酸ジイソプロピル、ミリスチン酸セチル、乳酸セチル、1-イソステアロイル-3-ミリストイルグリセロール、コレステリルイソステアレート、2-エチルヘキサン酸セチル、パルミチン酸-2-エチルヘキシル、ミリスチン酸-2-オクチルドデシル、ジ-2-エチルヘキサン酸ネオペンチルグリコール、オレイン酸-2-オクチルドデシル、トリイソステアリン酸グリセロール、ジパラメトキシ桂皮酸-モノ-2-エチルヘキサン酸グリセリル等のエステル類；2-ヘキシルデカノール、オレイルアルコール、2-オクチルドデカノール、パチルアルコール、セタノール、ステアリルアルコール等の高級アルコール、スクワラン、流動パラフィン、ワセリン、固形パラフィン等の炭化水素；ユーカリ油、ハッカ油、オリーブ油、ツバキ油、マカデミアナッツ油、ホホバ油、アボガド油、ラノリン、牛脂、豚脂、卵黄脂等の油脂；その他ベンジルアルコール、フェニルエチルアルコール、パルミチン酸デキストリン、d-δ-トコフェロール；各種シリコン誘導体などが用いられる。

【0015】また界面活性剤としては特に限定されない

が、ポリオキシエチレン（以下POEと略記）硬化ヒマシ油、POEアルキルエーテル、POE分岐アルキルエーテル、POE脂肪酸エステル、POEグリセリン脂肪酸エステル、POEソルビタン脂肪酸エステル、POEソルビトール脂肪酸エステル、POE硬化ヒマシ油アルキル硫酸エステル、POEアルキル硫酸エステル、ポリグリセリン脂肪酸エステル、アルキルリン酸エステル、POEアルキルリン酸エステル、脂肪酸アルカリ金属塩、ソルビタン脂肪酸エステル、グリセリン脂肪酸エステル、アルキルポリグルコシド、ポリエチレングリコール脂肪酸エステル、α-モノイソステアリルグリセリルエーテル、ステアロイルメチルタウリンナトリウム、POEラウリルエーテルリン酸ナトリウム、エーテル変性シリコン等が用いられる。

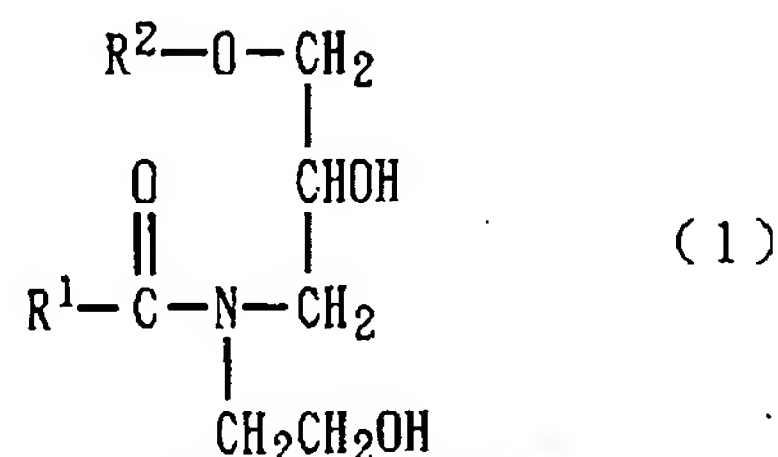
【0016】pH調節剤としては特に限定されないが、水酸化ナトリウム、水酸化カリウム、水酸化リチウム等の金属酸化物、トリエタノールアミン、イソプロパノールアミン、ジイソプロパノールアミン、L-アルギニン、L-リジン等の塩基性アミノ酸、尿素、ε-アミノカブロン酸、ピロリドンカルボン酸ナトリウム、リン酸水素ナトリウム、クエン酸ナトリウム、クエン酸、乳酸、コハク酸、酒石酸等が用いられる。なお、本発明の化粧料は、これらによりpH4~10の領域に調節することが好ましい。

【0017】セラミド類としては、脳や皮膚から抽出、精製されたものであっても、また、化学的方法によって合成されたものでもよい。かかる合成法としては、例えば特開昭59-7118号公報、WO93/22281号等に記載されている方法を用いることができる。セラミド類として特に好ましいものとしては、N-オレイルスフィンゴシン、N-(12-ヒドロキシオクタデカノイル)スフィンゴシン、N-(16-ヒドロキシヘキサデカノイル)スフィンゴシン、牛脳セラミド等が挙げられる。

【0018】擬セラミド類としては、例えば特開昭62-228048号公報、特開昭63-216852号公報等に記載された方法に従って製造されたものを挙げる事ができる。擬セラミド類として特に好ましいものとしては、次の式(1)

【0019】

【化1】



【0020】(式中、R<sup>1</sup>は炭素数9~17のアルキル基を示し、R<sup>2</sup>は炭素数10~18のアルキル基を示す)



【0021】ステロール類としては、コレステロール又はコレステロール誘導体が挙げられ、コレステロール誘導体としては、アルケニルコハク酸コレステリル、コレスタノール、炭素数12~36、好ましくは炭素数14~28の飽和又は不飽和の直鎖又は分岐鎖の炭化水素基を有するコレステリルエステル、デヒドロコレステロール等が例示される。これらのうちアルケニルコハク酸コレステリルとしては、特開平5-294989号公報に記載の製造法により合成されるもの、例えばn-ヘキサデセニルコハク酸コレステリルモノエステル、n-オクタデセニルコハク酸コレステリルモノエステル等が挙げられる。また、コレステリルエステルとしては、例えばイソステアリン酸コレステリル、1,2-ヒドロキシステアリン酸コレステリル、デヒドロコレステロール、ラノリン脂肪酸コレステリル、リシノール酸コレステリル等が挙げられる。これらのうち、アルケニルコハク酸コレステリル、コレステロールが好ましい。これらステロール類は1種でも2種以上を混合して用いてもよい。

【0022】アルコール類としては、特に限定されないが、例えばエタノール等の低級アルコール、セタノール、ステアリルアルコール、オクチルドデカノール等の高級アルコール又は多価アルコールとしてはエチレングリコール、ジエチレングリコール、トリエチレングリコール、それ以上のポリエチレングリコール類、プロピレングリコール、ジプロピレングリコール、それ以上のポリプロピレングリコール類、1,3-ブチレングリコール、1,4-ブチレングリコール等のブチレングリコール類、グリセリン、ジグリセリン、それ以上のポリグリセリン類、ソルビトール、マンニトール、キシリトール、マルチトール等の糖アルコール類、グリセリン類のエチレンオキシド（以下、EOと略記）、プロピレンオキシド（以下、POと略記）付加物、糖アルコール類のEO、PO付加物、ガラクトース、フルクトース等の単糖類とそのEO、PO付加物、マルトース、ラクトース等の多糖類とそのEO、PO付加物、またポリオキシエチレンメチルグルコシド（EO10以上）等のポリオキシアルキレンアルキルグリコシドが挙げられる。

【0023】抗炎症剤又は一重項酸素消去剤としては例えば、 $\alpha$ -カロチン、 $\beta$ -カロチン、 $\gamma$ -カロチン、リコピン、クリプトキサンチン、ルテイン、ゼアキサンチン、イソゼアキサンチン、ロドキサンチン、カプサンチン、クロセチン等のカロチノイド、1,4-ジアザジクロオクタン、2,5-ジメチルフラン、2-メチルフラン、2,5-ジフェニルフラン、1,3-ジフェニルイソベンゾフラン、 $\alpha$ -トコフェロール、 $\beta$ -トコフェロール、 $\gamma$ -トコフェロール、 $\delta$ -トコフェロール、ヒスチジン、トリプトファン、メチオニン、アラニン又はそのアルキルエステル、ジブチルヒドロキシトルエン、ブチルヒドロキシアニソール、アスコルビン酸、タンニン

酸、エピカテキン、エピガロカテキン、エピカテキンガラート、エピガロカテキンガラート等のタンニン類、ルチン等のフラボノイド等が挙げられる。これらのうち特に好ましくは、カロチン、トコフェロール、アスコルビン酸、タンニン酸、ジブチルヒドロキシトルエン、アラニン、ルチン、エピカテキンガラート、エピガロカテキンガラートが挙げられる。

【0024】本発明の化粧料は常法に従って製造することができ、種々の形態、例えば水/油、油/水型乳化化粧料、クリーム、化粧乳液、化粧水、油性化粧料、パック剤、口紅、ファンデーション、皮膚洗浄剤等とすることができる。

【0025】

【発明の効果】本発明のシワ予防・改善化粧料は、安全な植物抽出物を用い、しかもこれとグリチルリチン酸ステアリル又はイブシロンアミノカプロン酸と組み合わせることにより、相乗的に高いシワ予防・改善効果を奏する。さらに皮膚の保湿及び肌荒れ予防・改善効果にも優れる。

【0026】

【実施例】以下に実施例を挙げて本発明をさらに説明するが、本発明はこれらによって何ら限定されるものではない。

【0027】植物抽出物の製造例

【0028】製造例1 ハマメリス抽出物の製造法

ハマメリスの葉、樹皮の乾燥粉碎物100グラムに50v/v%エタノール1000mlを加え、室温で時々攪拌しながら3日間抽出を行う。得られた抽出液を濾過し、濾液を5℃で3日間静置したのち再度濾過して上澄みを得た。

【0029】製造例2 ボタン抽出物の製造法

製造例1においてハマメリスの乾燥粉碎物の代わりに、ボタンの根皮の乾燥粉碎物を用いた以外は、製造例1と同様にして製造した。

【0030】製造例3 ショウキョウ抽出物の製造法

製造例1においてハマメリスの乾燥粉碎物の代わりに、ショウガの根茎の乾燥粉碎物を用いた以外は、製造例1と同様にして製造した。

【0031】製造例4 センキンシ抽出物の製造法

製造例1においてハマメリスの乾燥粉碎物の代わりに、センキンシの全草の乾燥粉碎物を用いた以外は、製造例1と同様にして製造した。

【0032】実施例1、2

表1に示すO/Wクリームを下記製造法により調製し、それぞれについて、そのシワ防止効果等を下記の如く試験した。結果を表4に示す。

【0033】

【表1】

組 成 (重量%)	実施例		比較例	
	1	2	1	2
(1)ポリオキシエチレン(10)硬化ヒマシ油	1.0	1.0	1.0	1.0
(2)モノステアリン酸ソルビタン	0.5	0.5	0.5	0.5
(3)ステアロイルメチルタウリンナトリウム	0.5	0.5	0.5	0.5
(4)セトステアリルアルコール	2.0	2.0	2.0	2.0
(5)ステアリン酸	1.8	1.8	1.8	1.8
(6)コレステロール	1.5	1.5	1.5	1.5
(7)コレステリルイソステアレート	1.0	1.0	1.0	1.0
(8)ジカプリン酸ネオペンチルグリコール	8.0	8.0	8.0	8.0
(9)メチルポリシロキサン*1	5.0	5.0	5.0	5.0
(10)グリセリン	5.0	5.0	5.0	5.0
(11)1,3-ブチレングリコール	3.0	3.0	3.0	3.0
(12)擬セラミド*2	3.0	3.0	3.0	3.0
(13)ハマメリス抽出物*3	0.5	—	0.5	—
(14)ボタン抽出物*4	—	0.5	—	—
(15)グリチルレチン酸ステアリル	0.1	0.1	—	0.1
(16)トコフェロール	0.1	0.1	0.1	0.1
(17)防腐剤	適量	適量	適量	適量
(18)香料	適量	適量	適量	適量
(19)精製水	残量	残量	残量	残量

【0034】\*1：シリコーンKF-96A（6cs）、  
信越化学工業社製

\*2：擬セラミド

N-（2-ヒドロキシー-3-ヘキサデシロキシプロピル）-N-2-ヒドロキシエチルヘキサデカナミド（一般式（1）において  $R^1=C_{15}H_{31}$ 、 $R^2=C_{16}H_{33}$ ）

\*3：ハマメリス抽出物（製造例1記載の抽出物、固形分1.0%）

\*4：ボタン抽出物（製造例2記載の抽出物、固形分1.0%）

【0035】（製造方法）油相成分〔（1）～（9）、（12）、（15）～（16）〕を80℃で加熱溶解したものに、攪拌しながら80℃に加熱した水相成分〔（10）～（11）、（13）～（14）、（17）、（20）〕を加えて乳化した後、50℃まで攪拌冷却した。次いで、成分（19）を加え、さらに攪拌しながら室温まで冷却し、成分（18）を加えてO/Wクリームを得た。

【0036】（試験方法）冬期に頬部に肌荒れを起こしている20～50才の女性10名を被験者とし、左右の頬に異なる皮膚外用剤を2週間塗布する。2週間の塗布が終了した翌日に、次の項目につき試験を行った。

【0037】（1）皮膚コンダクタンス：37℃の温水にて洗顔後、温度20℃、湿度40%の部屋で20分間安静にした後、角質層の水分含有量を皮膚コンダクタンスメーター（IBS社製）にて測定した。皮膚コンダクタンス値は値が小さいほど肌荒れが生じている。結果は平均値で示した。

【0038】（2）肌荒れスコア：肌荒れを肉眼で観察し、下記表2に示す基準により判定した。スコアは平均値で示した。

【0039】

【表2】

20

30

40

50

# スコア

0	肌荒れを認めない
1	かすかに肌荒れを認める
2	肌荒れを認める
3	ややひどい肌荒れを認める
4	ひどい肌荒れを認める

【0040】（3）シワ形成抑制効果

（評価方法）ヘアレスマウスに、乳化型化粧料（80μl）を塗布した。2時間後にUV-B（1MED以下）を照射し、その直後にさらにサンプルを塗布した。この操作を週5回、16週にわたって行った。照射エネルギー量はUV-Radiometer（Tokyo optical, VU-R-305/365日）を用いて測定し、1回の照射量が1MED以下となるように0.28mW/cm<sup>2</sup>のエネルギー量で総照射量100mJ/cm<sup>2</sup>とした。16週の塗布／照射が終了後、形成されたシワの度数を肉眼により下記の基準（シワ指数）で評価した。

【0041】

【表3】

基準（シワ指数）

- 1：シワが無形成
- 2：シワがわずかに形成
- 3：シワが若干形成
- 4：シワが強固に形成

【0042】

【表4】

皮膚老化防止効果	実施例		比較例	
	1	2	1	2
(1) 皮膚コンダクタンス	51	53	36	29
(2) 肌荒れスコア	0.3	0.4	0.8	1.0
(3) シワ指数	0.7	0.8	2.0	3.0

\*

(組成)

- (1) シリコーン被覆酸化亜鉛  
 (2) p-メトキシ桂皮酸2-エチルヘキシル  
 (3) ビタミンEアセテート  
 (4) コレステリルイソステアレート  
 (5) ポリエーテル変性シリコーン\*5  
 (6) メチルポリシロキサン\*1  
 (7) 環状シリコーン\*6  
 (8) 硫酸マグネシウム  
 (9) 擬セラミド\*2  
 (10) ショウキョウ抽出物\*7  
 (11) グリチルレチン酸ステアリル  
 (12) グリセリン  
 (13) 防腐剤  
 (14) 精製水

(重量%)

- 7.0  
 2.0  
 0.2  
 1.5  
 2.5  
 6.0  
 12.0  
 0.7  
 3.0  
 0.5  
 0.1  
 3.0  
 適量  
 残量

【0045】\*1, 2:前記に同じ

\*5:シリコーンKF-6015(信越化学工業社製)

\*6:シリコーンSH244、SH245又はSH244とSH245の3:2(重量比)混合物(東レダウコーニング・シリコーン社製)

\*7:ショウキョウ抽出物(製造例3記載の抽出物、固形分2.0%)

【0046】(製造方法)油相成分〔(1)~(6)、30(9)、(11)〕を80℃に加温して、溶解したものに、80℃に加温した水相成分〔(8)、(10)、※

(組成)

- (1) ポリオキシエチレン(40)硬化ヒマシ油  
 (2) ハマメリス抽出物\*3  
 (3) 尿素  
 (4) ε-アミノカプロン酸  
 (5) リン酸一水素ナトリウム  
 (6) クエン酸  
 (7) グリセリン  
 (8) エタノール  
 (9) カルボキシビニルポリマー\*8  
 (10) 水酸化カリウム  
 (11) 防腐剤  
 (12) 精製水

(重量%)

- 1.0  
 0.5  
 1.0  
 0.1  
 0.75  
 0.25  
 10.0  
 4.0  
 1.5  
 0.45  
 適量  
 残量

【0049】\*3:前記に同じ

\*8:カーボポール941(BF Goodrich chemical社製)

(組成)

- (1) ポリオキシエチレン(40)硬化ヒマシ油

(重量%)

- 1.0

\*【0043】以下に示す、組成(実施例3)のサンスクリンクリームを下記の製法により調製した。得られたクリームは、シワ予防・改善効果に優れるものであった。

【0044】実施例3

【表5】

※(12)~(14)を攪拌しながら加え、50℃まで攪拌冷却した。次に、成分(7)を加え、さらに攪拌しながら室温まで冷却して、保湿サンスクリンクリームを得た。

【0047】以下に示す組成(実施例4、5)の保湿エッセンスを下記製法により調製した。得られた保湿エッセンスは、シワ予防・改善効果に優れたものであった。

【0048】実施例4

【表6】

【0050】実施例5

【表7】

11

12

(2) センキンシ抽出物\*<sup>9</sup>

0.5

(3) 尿素

1.0

(4) ε-アミノカプロン酸

0.1

(5) リン酸一水素ナトリウム

0.75

(6) クエン酸

0.25

(7) グリセリン

10.0

(8) エタノール

4.0

(9) キサンタンガム

1.0

(10) 香料

適量

(11) 防腐剤

適量

(12) 精製水

残量

【0051】\*9: センキンシ抽出物(製造例4記載の抽出物、固形分1.0%)

【0052】(製造方法) 成分(1)~(8)、(11)及び(12)を均一に攪拌溶解させ、これに成分(9)を加え、均一に分散させる。さらに成分(10)を加え、保湿エッセンスを得た。

\*

\*【0053】以下に示す組成の油性ファンデーションクリームを調製した。得られたファンデーションクリームはシワ予防・改善効果に優れたものであった。

【0054】実施例6

【表8】

(組成)

(重量%)

(1) シリコーン被覆亜鉛

5.0

(2) p-メトキシ桂皮酸2-エチルヘキシル

3.0

(3) コレステリルイソステアレート

3.0

(4) ポリエーテル変性シリコーン\*<sup>5</sup>

3.0

(5) メチルポリシロキサン\*<sup>1</sup>

5.0

(6) 環状シリコーン\*<sup>6</sup>

10.0

(7) ジカプリン酸ネオペンチルグリコール

2.0

(8) グリセリン

2.0

(9) 酸化チタン

3.0

(10) セリサイト

2.0

(11) タルク

3.0

(12) ベンガラ

0.05

(13) 黄酸化鉄

0.10

(14) 黒酸化鉄

0.05

(15) ハマメリス抽出物\*<sup>3</sup>

0.5

(16) グリチルレチン酸ステアリル

0.1

(17) 防腐剤

適量

(18) 香料

適量

(19) 精製水

残量

【0055】\*1, 3, 5, 6: 前記に同じ

【0056】(製造方法) 油相成分〔(1)~(5)、(7)、(16)〕を80℃で加熱溶解したものに、攪拌しながら80℃に加熱した水相成分〔(8)、(15)、(17)、(19)〕を加えて乳化した後、50

℃まで攪拌冷却した。次いで、これに成分(6)、

(9)~(14)及び(18)を加え、さらに攪拌しながら室温まで冷却し、ファンデーションクリームを得た。

フロントページの続き

(72)発明者 豊田 律子

千葉県千葉市緑区平山町1926-55